

時危思偉人

表

「解説」

井上 勝也（大学文学部教授）

新島襄のこの言葉は明治二十二年十月二十五日、五年生の横田安止に宛てた手紙の追伸に書かれたもので、その前後は次の通りである。「当今天下之実況ヲ見、弥、時危思偉人ノ語ヲ思起シ、偉人之勃乎トシテ起リ来ラン事ヲ切望致し居候」。

明治二十二年は二月十一日、大日本帝国憲法発布の日に、新島のアンドーヴァー神学校時代からの知己である文部大臣森有礼が刺客に襲われて翌日斃れ、右記の手紙が書かれた一週間前の十月十八日、新島の大学設立運動を支援していた外務大臣大隈重信が条約改正問題にからんで玄洋社員に爆弾を投げられ負傷するという事件が起った。新島は同年十一月九日、徳富猪一郎宛の手紙の中にもこの言葉を挙げている。

我が国が国会を開設し、近代国家としてスタートする明治二十三年を目前にして、新島は政治上の混乱や人心の動揺に憂慮し、「偉人」の出現を切望したのであろう。この場合の「偉人」とは「非常に偉い人」というよりも、「強力なりリーダーシップを発揮しうる見識と実行力をもつた人」という意味に解釈したい。昨年以來、日本、アジア各国で、国家や企業の責任者の力量が問われている。我が同志社の現状を思う時、新島のこの言葉は我々の心に強烈に訴えるものがある。